メインシナリオ／サイド第５回
『炎の慟哭　第１話』個別リアクション

『淡い夢が砕かれる時』

　訓練室のある階と同じ階に、アニサは収容されていた。
　騎士団員監視のもと、アリス・ディーダムはその部屋に通された。
　犯罪者らしいのだが、そのあたりについてアリスが説明を受けることはなかった。
「手伝いなんていらないんだけど、仲介役になってくれるのなら」
　訓練の時とは目つきも、声色も、仕草もまるで違う女性が、そこにいた。
「あの男とはあまり関わりたくないのよ」
　そう言って、アニサはアリスの手伝いたいという申し出を受け入れた。
「どうしてですか？」
「不愉快になるからよ。私に流れている血が、あの男に流れている血を嫌悪している」
　それはどういう意味だろうと、アリスは不思議に思った。
「……レイザ先生から聞いてますよね。教えてください。洞窟のこと、石板のこと、洞窟で亡くなった人のこと」
「いいわ、そんなに聞きたいのなら話してあげる。あなたも希望なんて何もないという現実を知ればいいのよ」
　アーリーは暗く冷たい目で、アリスに語り始めた。

　かつて、この地に暮らしていた強い炎の魔力を操る一族のこと。
　一族の中には、常に体に龍のような蛇のような痣を持つ女性が１人存在していた。
　その女性が二十歳になる頃に、一族が護る山に異変が起き、その異変を鎮めるために、痣を持つ女性はその体を山に捧げていた。
　１００年ほど前、痣を持っていた女性は、ウォテュラ王国から訪れた者に、王国へと連れ去られてしまった。
　異変を鎮める手段を失った一族は、命を賭したが火山は大噴火し、この辺り一帯は滅んでしまった。
　唯一生き延びたのは、アーリーの曽祖父だけ。そして、連れ去られた痣を持つ女性の子孫が、レイザ・インダーであること。

「水の神殿は火山の力を押えるために作られたそうよ。でも、神殿の力は障壁に使われている。だから、山から溢れる力を鎮めるには、痣のある人物の身体を使うしかない」
「人の、身体をですか……もしかして、アニサさんに痣が？」
「私の身体にはないわ。痣を持っているのは」
　一旦言葉を切り、アーリーは低くこう続けた。
「レイザ・インダーよ」
　アリスの心臓が跳ね上がった。
「双子の姉と共に痣を持って生まれてきたんですって。私は彼を火山の中のマグマの中に連れていくの。私にも戻る手段はないわ。
　そして私達一族は滅びる。今をしのいでも、世界はいずれ滅びる。暴走した水の魔力の影響で、世界の全てが水の中に沈んだのと同じように」
　冷ややかで暗く、どこか虚ろな目でアーリーは言う。
「世界に終わりが訪れる」
　息をのみ、硬直するアリスに、構わず言葉を続けていく。
「まだはっきりとは分からないけれど、石板に記されていたのは、正しい聖女――痣のある身体の捧げ方。
　世界の為に、私たちが正しく死ぬ方法」
　残酷な現実に、アリスは強い眩暈を感じた。
　知ることを望んだのは、自分だ。
　残された僅かな時間に、自分に何が出来るだろうか……。

こちらのリアクションは以下のＰＣに発行されています。
アリス・ディーダム